

磨製石斧生産をめぐる覚書2000

石黒立人*

1. 「斧」をつくるということ

「斧」とは機能部である「斧頭」と支持部である「柄」という二つの部品が組み合わされたものであり、この関係は材質がどうであれ変わることはない。どちらか一方が欠けても「斧」としての役割は果たすことができない。破損した場合には、「柄」であれば木器の製作工程で、「斧頭」であれば石器の製作工程というように部品の材質にもとづく生産工程によって補給されることになる。

問題はこの補給の体制である。実際のところ、こうした部品の備給体制についてはわからないことが多い。「斧」としての完成品が道具であるとしても、使用による破損は必然であるから、それに備えることは安定した活動を保証するために不可欠である。

ところが、これまで「斧」が備給の対象であったのか、部品である「斧頭」「柄」が備給の対象であったのか、について議論が行われることはほとんどなかった。漠然としたイメージが漂っていたというべきであろう。

小論では、上記の課題について論証するには不十分だが、せめて可能性ぐらいは提示できるように努めたいと思う。

2. 磨製石斧生産の二つかたち

A. 原産地型生産遺跡

原産地型生産とは、石材産出地近傍における石斧生産遺跡を指す。従来の研究において主要な対象とされた遺跡である。原産地において生産物はもっぱ

ら外部へ搬出されたと考えられるが、また消費地にとってもその生産物は外部からの搬入というかたちをとることになったと考えられ、どちらにしても<外部型>と言い換えることができよう。

原石産地における一貫した生産工程によって産み出された未製品（半製品）もしくは製品が搬出される類型は、北部九州の今山遺跡資料をもとにモデル化された、まさに基本的な類型である。今なお<生産>と<流通>に関わる多くの研究はこれを範型としている。今後は、それぞれの地域に即して具体的にどのように描くことが可能か、細部にわたる検討が必要である。

伊勢湾全域で見た場合には、まず宮山遺跡という石材原産地が押さえられたことによって、外部型の存在が確定された。今後の課題はその内容の検討であり、生産物の移動に関してどのようなラインが形成されていたのかを明らかにしなければならない。伊勢湾地方における原産地型石斧生産遺跡は、愛知県豊川市麻生田大橋遺跡と三重県員弁郡大安寺町宮山遺跡の2ヶ所が知られる。

a. 麻生田大橋遺跡

麻生田大橋遺跡は豊川下流右岸の氾濫原に面する標高12mほどの低位段丘上に立地している。愛知県埋蔵文化財センターと豊川市教育委員会によるこれまでの調査によって多数の土器棺墓群が検出されたことで著名であり、大方には墓地遺跡として認知されている。しかし、この点については再考が必要である。遺跡の性格を墓地に限定するのではなく巨視

*愛知県埋蔵文化財センター 主査

豊川の河原

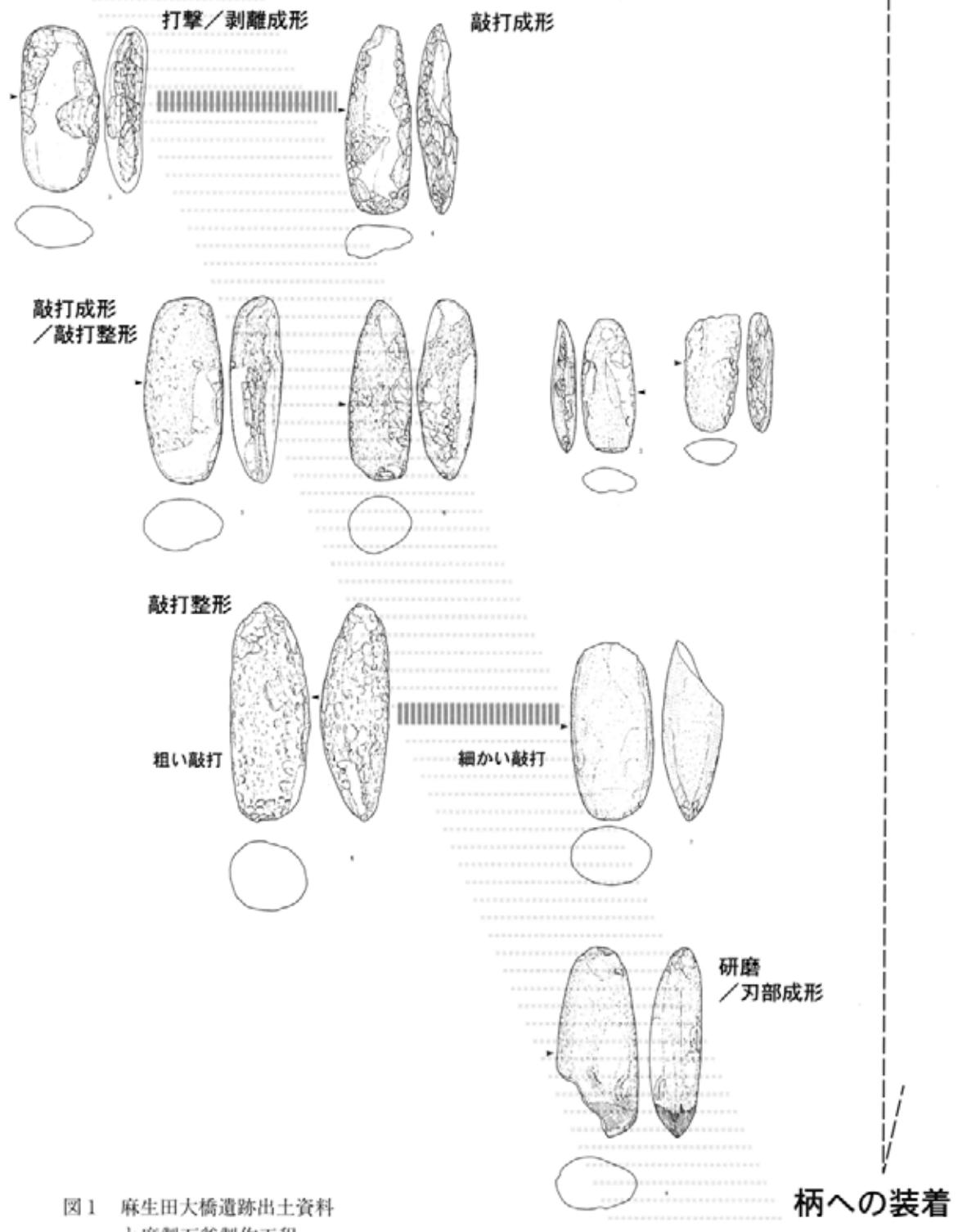


図1 麻生田大橋遺跡出土資料
と磨製石斧製作工程

的には集落遺跡として認知すべきであると考える。なぜなら、確かに建物関係の遺構はほとんど検出されていないが、出土土器は土器棺に限定されるわけではないし、石器も各種が出土している。そして磨製石器生産に關係する未成（製）品には磨製石斧に加えて多頭石斧、環状石斧、石棒などがあるというように、実用品・非実用品にまたがる製品が生産されているからである。したがって、これらの点から主要な生産部門を含む集落として捉え返す必要があるだろう。時期的には突帯紋土器期から弥生前期にかけてが該当すると思われる。

未成（製）品関係の資料はほとんどが後世の遺構から出土したものであり、調整剥片などの有無もはっきりしない。だが素材が豊川の河原から採取された円碟、亜円碟である可能性が高いことから、手頃な形態のものを入手すれば打割工程は省略可能であり、剥離整形以後の工程が主要なものとなる。

重さ500g程度の通常タイプについて出土資料から復元できる工程は、

- ①長く扁平な円碟の側縁に強い打撃を加えて側縁のカーブを緩やかにするとともに断面も梢円形に近くなるように整形する。このとき側縁には潰れが集中し、そこから剥離が平坦部にのびる。剥離整形段階に該当する。
- ②敲打を加えて全体の形を整える。粗い敲打と細かい敲打に区分できる。敲打整形段階に該当する。
- ③刃部付近を研磨して刃をつける。研磨段階に該当する

となる。

小型で身が扁平な石斧は円碟そのものではなく円碟から打ち剥がした剥片素材を用いており、最初期に打割段階が加わる。以後は同様の工程を経て完成品に至る。

b. 宮山遺跡

宮山遺跡は員弁川の最上流域で分岐する青川との合流点付近の標高73～75mほどの河岸段丘上に立

地している。三重県埋蔵文化財センターによる発掘調査では突帯紋土器期の柱穴群（竪穴建物群か）と弥生中期の建物群が少し離れて検出されている。磨製石斧生産関連遺物はそのほとんどが弥生中期遺構群の分布域から出土しており、時期的にも弥生中期に属すと考えられている。

石斧の未成（製）品は両刃、柱状片刃、扁平片刃に区分できる。出土資料のほとんどは両刃石斧関連である。扁平片刃は剥片素材を用いており、成形・整形も剥離段階まで敲打段階は認められない。この点は再生品ではない消費地遺跡出土の扁平片刃石斧の多くに敲打痕が認められることとも関連するであろう。宮山遺跡では扁平片刃石斧の完成品も若干出土しているが粗悪である。柱状片刃石斧未成品の認定は可能性にとどまる。図3の208は細身で柱状であること、側面に自然面の平坦面を残していることからそのように推定したが、多く見積もっても数点というところか。

両刃石斧は亜円碟を素材として製作され、未成（製）品も最終の研磨工程を除く粗割段階以下の各工程に該当するものが出土している。サイズは20cm以上の大形品、15～16cm程度の中形品、11～13cmの小形品の3種がある。身は厚手のものから薄手のものまで幅がある。刃部をつけた完成品は僅かだが出土している。しかし、完成品は仕上げが不充分であったり、身の扁平なものや乳棒状を呈するものもある。実は未成品と報告された資料中に打製石斧が1点含まれており、このことから完成品には時期が遡るもののが含まれている可能性もある。いずれにしても、完成品に大形サイズではなく、中小サイズに限定され、また破損品を再生したものも1点あるので、自家用と判断してよいであろう。ところで、破損再生品は破面が斜めに割れ、そこを新たに刃部として再生したものであり、消費地遺跡出土例と共通した特徴をもつ。

ともかく佐藤由紀男氏によれば未成品率80%以上

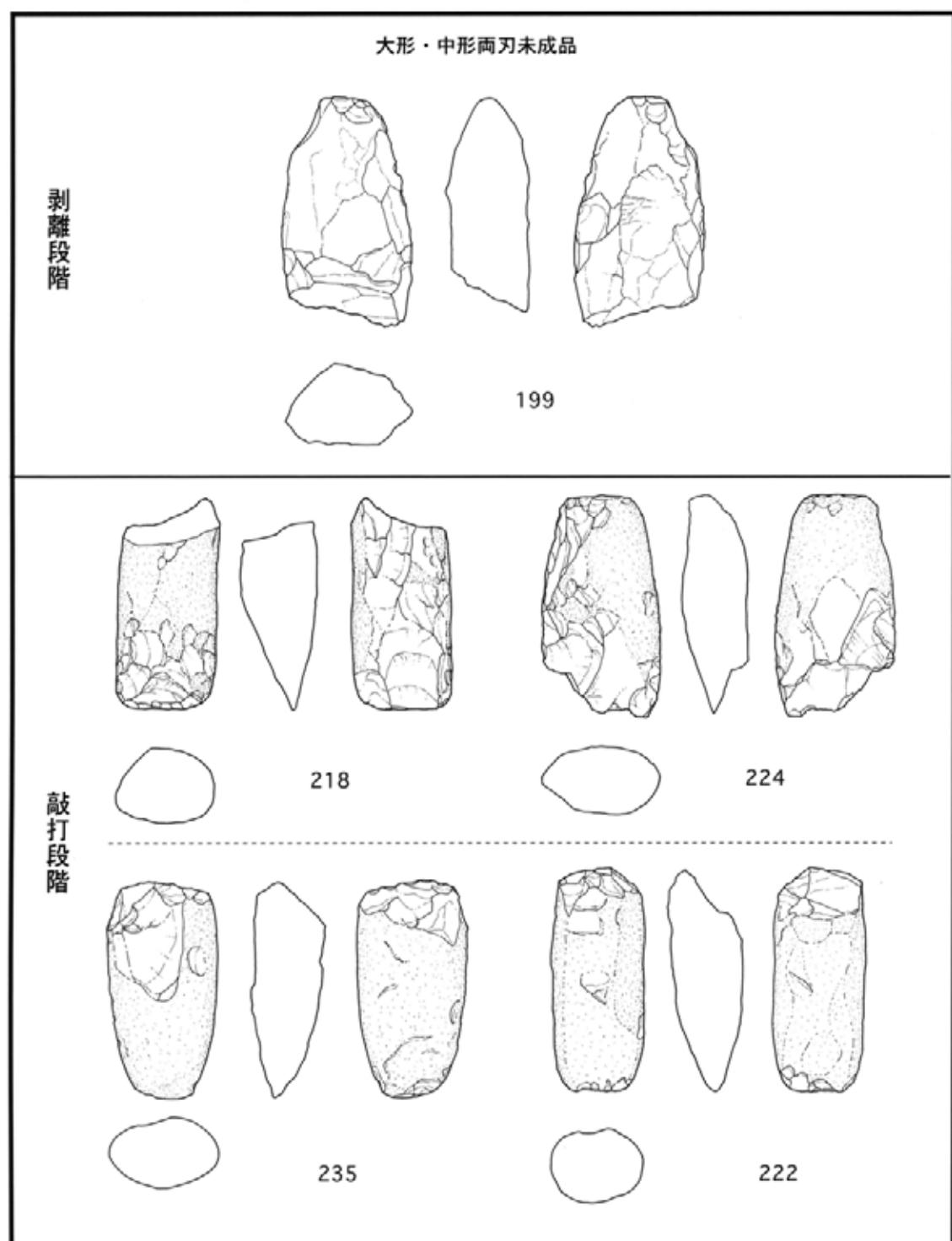


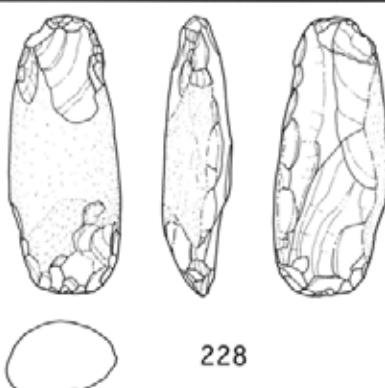
図2 宮山遺跡出土資料 (1) ※報告書掲載図から再トレース 一部改変

扁平両刃未製品



209

231



228



233

中形両刃未製品



208

柱状片刃未成品



236

破損再生品

図3 宮山遺跡出土資料 (2) ※報告書掲載図から再トレス 一部改変

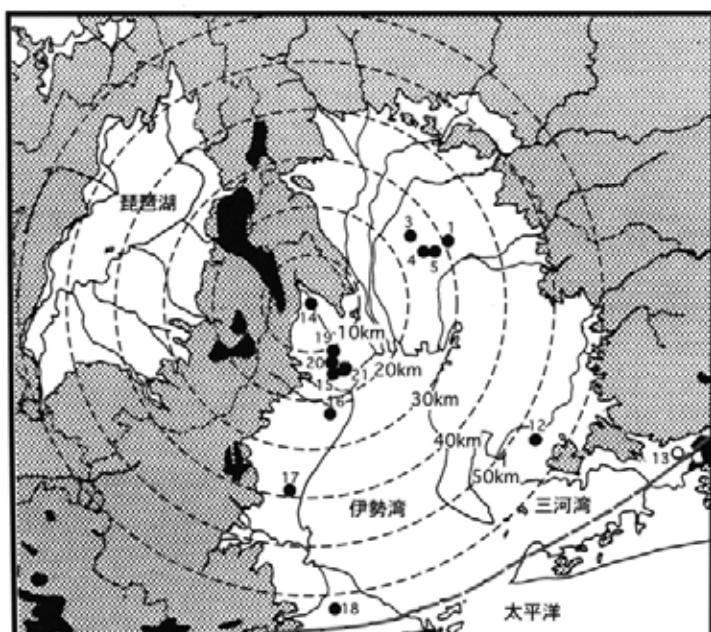
とのことであり、まさに原産地型生産遺跡の典型と評価される。

石斧生産が行われた時期に関しては出土土器からおおむね弥生中期中葉から後葉にかけてと考えられるが、出土土器には伊勢地方以外に、尾張地方や三河地方などからの搬入品があり特筆される。また一部には伊勢地方よりも西の地域のものがあり、これらの点は生産物の搬出先を考える指標になるだろう。

さて、宮山遺跡を石斧生産遺跡と認めた上で言えば、宮山遺跡から出土した非完成品の多くが破損していることはそれらが後世に破壊されたのでない限り当時破損して廃棄された失敗品（未成品）であることを示し、そして破損品でないものはなんらかの理由で次段階の工程に進まなかった未成（製）品である、と結論づけることになるが、そこに問題はないのだろうか。

この問題に関連する事項をあげれば、
 ①出土資料中には形態的に明らかにいびつであるとしか言いようのないものが含まれていること
 ②幅や厚さは大形サイズに一致するのに長さが中形サイズのものがあること
 ③石斧とするにはかなり扁平で敲打を加えるには薄すぎるものがあることである。

①や③については想定される完成品のイメージが



塩基性の岩帯 を含む地域	1. 細日遺跡 (I ~ IV) 3. 一色青海遺跡 (IV) 4. 大洲遺跡 (IV) 5. 阿須陀寺遺跡 (III ~ IV) 12. 開島遺跡 (III ~ IV)	13. 麻生田大橋遺跡 (~ I) 14. 宮山遺跡 (~ I ~ III ~ IV) 15. 永井遺跡 (I ~ IV) 16. 上箕田遺跡 (I ~ IV) 17. 納所遺跡 (I ~ IV)	18. 金剛坂遺跡 (I ~ IV) 19. 大谷遺跡 (I) 20. 上畠遺跡 (IV) 21. 上野遺跡 (IV)
標高1000m 以上の山地			
● ハイアロクラスタイト製磨製石斧 ○ 塩基性岩製石斧	堀木真美子 1995 を一部改変		

消費地の中で見つからないことがある。①は形がいびつだから製作を放棄したにしては、いびつさを許容した条件が問題となるだろう。

③については、報告書掲載図では敲打面とされた部分が剥離面である場合が多く、製作工程としては側面への敲打で終了している。おそらく、主面に相当する平坦面に敲打を加えるれば破損した可能性が高かったであろう。破片が接合しているので、側面への敲打で破損した可能性も高いが、いずれにしてもいいたいどのような製品になるのかイメージがわかない。未製品としても全体の工程の流れにどのように組み込まれるのかが不明確である。この他報告書には敲打痕が表現されたものが多く掲載され、敲打段階が安定して存在するという印象を与えるが、実際の資料を観察してみると剥離面の荒れと敲打との区別がつきにくいものがあったり、明らかに剥離面のものもある。出土資料に占める割合では意外に敲打工程は進行していない印象を受けるのであり、それは上述したように、身の厚い、少なくとも通常の両刃石斧の幅厚比に相当する資料が少ないとによるからであろう。つまり、身の厚い通常形態の両刃石斧と身の薄い形態への分岐が剥離段階にあって、それが敲打段階において歩留まりにおける前者の高さと後者の低さとして、出土資料に反映されたということ。

尾張地方の資料では、弥生中期後半になると製作工程の手抜きが進行するのか、消費地遺跡出土資料には敲打を十分に加えず剥離痕をそのまま残したり、研磨も刃部近辺に限定されるなどの傾向が目立つようになる。これを粗雑化と言えば言えないこともないが、そうであるなら宮山遺跡における敲打段階の不十分な資料が多いことも、それが未成（製）品だからではなく、工程の簡略化に対応したが故に出現頻度に反映されたと考えることもできる。すなわち、時期による工程内容の変化が出土資料中に共存しており、そのために製作工程もいささか見え難くなってしまっているということではないか。身の厚い、いわゆる太型蛤刃と呼ばれる両刃石斧と身の扁平な両刃石斧の出現頻度のピークにずれがあるのかどうかが関わってこよう。

図4 宮山遺跡と周辺の遺跡

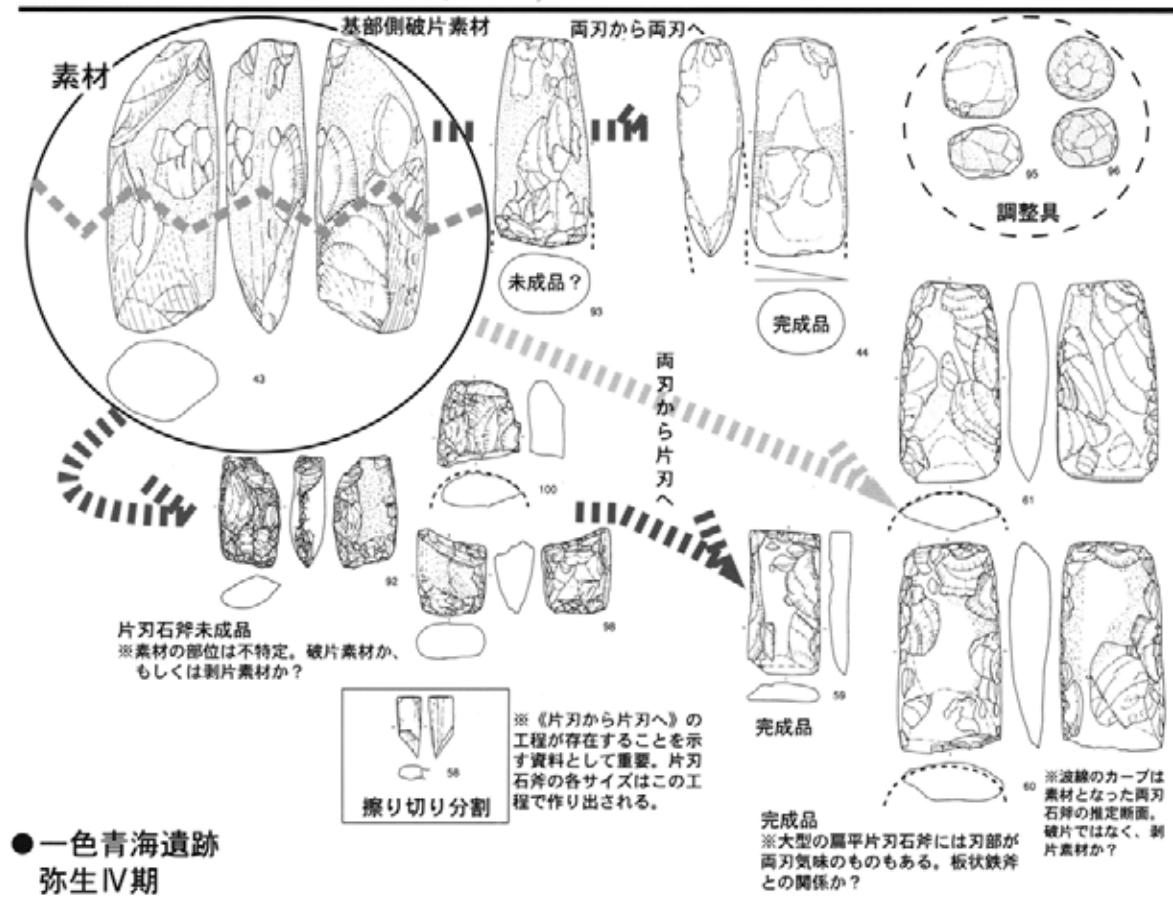
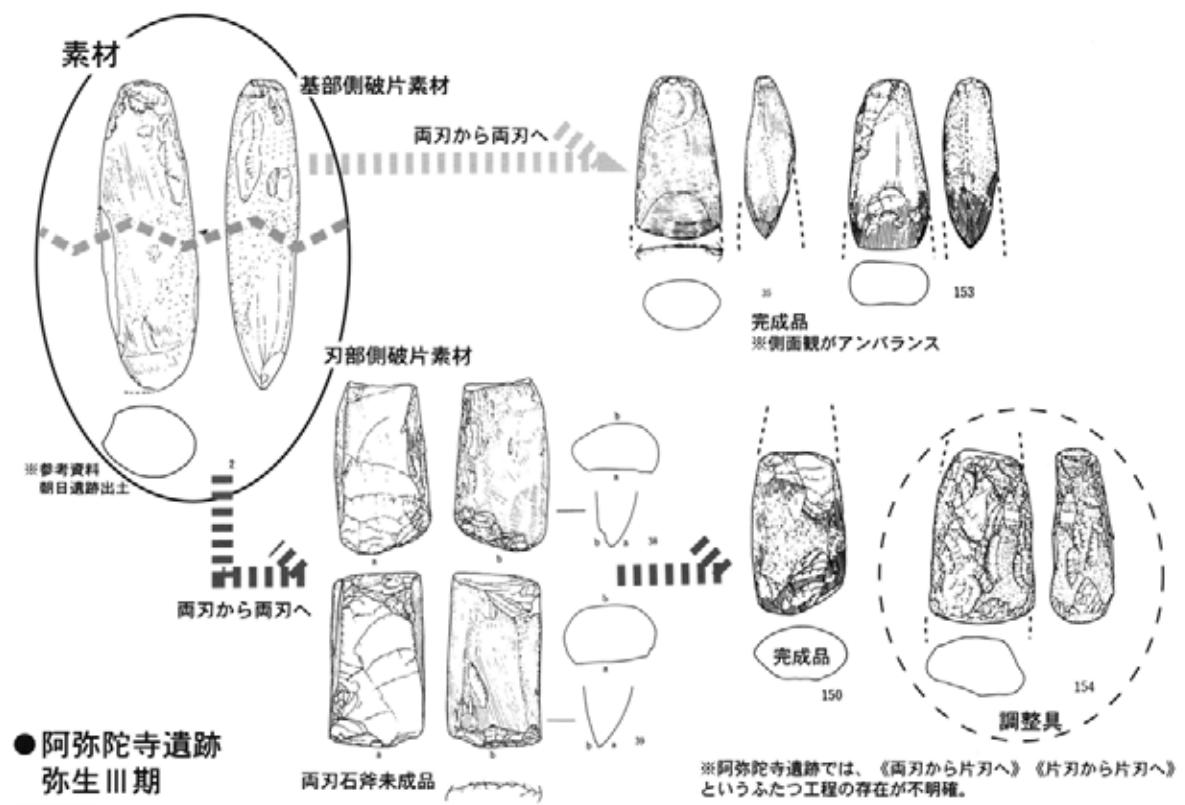


図5 阿弥陀寺遺跡一色青海遺跡磨製石斧関連資料

●朝日遺跡

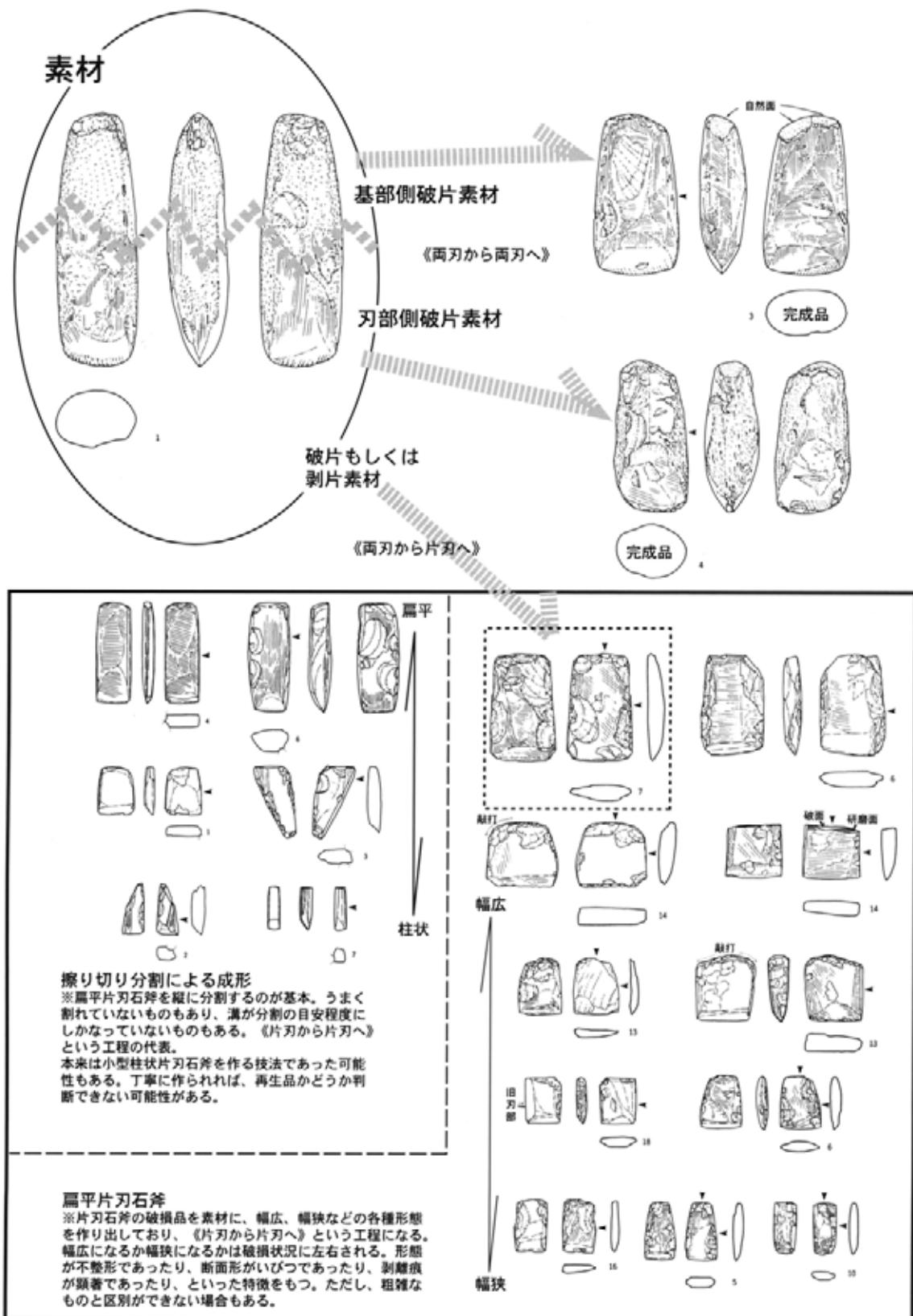


図6 朝日遺跡磨製石斧関連資料

また、②は破損品の再生に関連するもので、生産地における類型としては違和感があるが、それはく生産地>といえども社会の縮図であったということであろう。

ところで、敲打段階が終了すればあとは研磨して刃を付けるだけで完成品になるわけで、すなわち敲打終了後は外部へ搬出されるという結論が導かれる事になるのだが、その場合に、研磨によって刃を付けた完成品を搬出したのか、敲打完了後の未製品を搬出したのかという点が問題となる。わたしは未製品段階で搬出すると考えたが、しかしそう吟味すれば、この考え方も両刃石斧の生産工程が極めて定型的であるという前提にもとづくのであって、実は検証されていない。この点については後にふれたいと思う*。

B. 消費地型生産遺跡

石材産地から離れた、通常は一般的な集落の範疇で捉えられる遺跡である。

主たる素材が原産地と同様の原石素材ではなく、日常的な活動で発生する破損品であり、それからの再生産という構造によって特徴づけられる類型である。生産工程の内容は粗割段階に相違があるものの、以後の工程が原産地型と大きく異なることはない。ただ、生産物は遠隔地の遺跡へと広域に流通したとは考えがたく、カバーする範囲もせいぜいが近在の遺跡であろうことから、外部型に対比させて内部型と呼ぶことにする。

破損品からの再生産をいかに認識するのかという点では、単に粗雑なものと、粗雑さが一つの特徴となっていることとの区別をいかにつけるのかが、大きな課題となる。そのためには時期的な変化をまず明らかにしなければならないのであり、発掘調査における資料の取り扱いが重要となる。

三重県下での未成（製）品出土遺跡には納所遺跡がある。愛知県では三河の事情がよくわからないが、尾張では朝日遺跡、一色青海遺跡で未成（製）品が出土している。生産工程を保持しているかどうかは、未成（製）品に加えて工具が出土しているのか否か

が重要な判定材料となる。原産地型遺跡との比較では敲打調整具の有無が鍵となる。

a. 朝日遺跡

朝日遺跡出土の未成（製）品については、原産地型資料に類似する母岩素材からの一貫した生産工程に共通するものをⅠ類、消費地独自で破損品を素材とするものをⅡ類として大別した。要は、Ⅰ類の分類基準は敲打痕もしくは敲打面、そして研磨面が観察されないことであるから、まったく破損素材ではないとは言えない。

朝日遺跡においては当然のことながらⅡ類が卓越し、Ⅰ類は僅かとなる。

Ⅰ類の種別は、片刃類が主で、両刃はほとんど認められない。Ⅱ類では、両刃は中形サイズ以下に限定され、片刃は扁平片刃を主とする。製作技法では擦り切り技法が認められ、Ⅱ類製作と関連するのであろう。

b. 一色青海遺跡

未成品はⅠ類、Ⅱ類ともに出土している。Ⅰ類は角礫状の母岩で宮山遺跡で見られるのとは原石の形状が異なる。片刃を主とするようである。Ⅱ類は両刃の破損品を素材とするもので、扁平片刃が主となる。当遺跡でも擦り切り技法が認められる。

3. 生産と流通の実態

石斧の生産地をめぐっては上述のように大きく原産地型=外部型、消費地型=内部型という二つの類型に区分した。ここでは後者の評価が目下の課題ということになる。

内部型の展開については、同時期に複数存在するという状況を現在のところ認めるには至っていない。朝日遺跡至近の阿弥陀寺遺跡では、破損品の出土例は両刃について認められ、再生産品も同じく両刃について認められる。ところが、石斧と同一石材の敲打工具はあるが多面体状を呈する敲打調整具の出土はなく、また朝日遺跡のように片刃石斧に再生産品であることを窺わせるものは出土していない。出土していないという点を絶対的基準とすることはできな

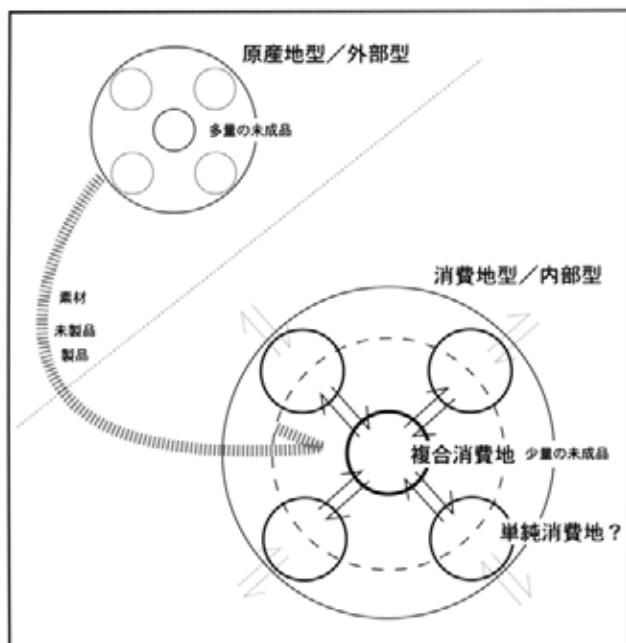
*未成品とは破損品の意味。未製品とは製品（完成品）の直前段階。半製品とも言う。

いが、阿弥陀寺遺跡のようなありかたが消費地遺跡としては一般的であったなら、ここに原産地型=外部型、消費地型=内部型=複合消費地の両者にとつての消費地=単純消費地を設定できる。

このように、石斧の生産と流通については、いちおう原産地型=外部型、消費地型=内部型を起点に生産の行われない単純消費地を製品流通の終着点として位置付けることができる。さて、問題は、単純消費地における破損品が内部型生産サイクルに乗るのかどうかである。阿弥陀寺遺跡における両刃石斧破損素材からの再生品が阿弥陀寺遺跡での内部型生産ではなく他遺跡での生産（この場合は朝日遺跡が関係することになる）であったとすれば、同様のことは弥生Ⅳ期の一色青海遺跡や大測遺跡の周辺遺跡との関係においても想定する必要がある。つまり、石材産地が素材の供給元である外部型と、複合・単純の両消費地が（破片）素材の供給元である内部型という構図を提示することができる。

4.まとめ

伊勢湾地方における少数の遺跡から明らかになったのは、石斧生産には原産地=外部型と消費地=内部型の2種類があり、消費地という観点では後者は複合消費地であり、単純消費地と対比されることである。伝統的な研究の組上にあったのは前者であり、後者はイレギュラーなものと考えられてきた。しかし、朝日遺跡における様相は、原産地から離れれば離れるほど通常の形態となった可能性が高い。そこ



で改めて検討が必要となるのが単純消費地の特定であろう。果たして全くの消費地が存在するのかどうか、当地域において石斧生産がそれほどまでに特化する条件にあったのかどうかなど、これらの点は分業と専業の問題を区別するためにも重要な課題である。

さて、内部型が特異な形態ではなく通常形態であったのかどうか。この点は石斧の流通量にも関わる重要な問題である。原産地型=外部型ではすべての消費地をカバーできなかったから消費地型=内部型における生産が行われたのか、大規模集落遺跡の成立条件に内部型が組み込まれていたのか、単に人間活動の柔軟さが内部型を成立させたのか、などなど。

いずれにしても、石斧生産において内部型が存在したことは、当地域における生産物の流通量が決して多くはなかったことを示していると言えそうだ。手工業生産と流通が大規模集落と密接に関係し、また社会統合において重要な基盤を為したという筆者の理念に対して、実態としての生産量や流通量はそれほど多く見積もることができないという自らの結論はいささか皮肉めいてはいるけれども、ただ、内部型の重層化という方向が新たに見えてきたことは、成果と言えるかも知れない。

本稿を成すにあたり、深澤芳樹、田崎博之、石川日出志、佐藤由紀男、竹内英昭、堀木真美子、町田勝則、白井直之、荒井 格、原田 幹、森下英治、直井雅直の諸氏および、三重県埋蔵文化財センター、財団法人長野県埋蔵文化財センター、財団法人香川県埋蔵文化財センター、松本市立考古博物館にお世話をなった。記して感謝したい。

参考文献

三重県埋蔵文化財センター 1999 「宮山遺跡」。
堀木真美子 1995 「石材の移動」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター創立10周年記念シンポジウム 朝日遺跡を科学する 資料集』。
愛知県埋蔵文化財センター 1991 「麻生田大橋遺跡」。
愛知県埋蔵文化財センター 1990 「阿弥陀寺遺跡」。
愛知県埋蔵文化財センター 1994 「朝日遺跡Ⅳ」。
愛知県埋蔵文化財センター 1998 「一色青海遺跡」。

図7 外部型・内部型関係モデル